

2017年5月21日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記1章11～21節

説教：王の跡を継ぐ者を教えてください

あらすじ

ダビデがイスラエルの王となったのは三十歳の時で、それ以来ずっと体力の続く限りイスラエルのために尽くしてきました。国としての力が弱かったので、敵がすきを狙って次々と襲ってきます。そのたびごとにダビデは先頭に立って敵を押し返すことで、じょじょに人々は安心して暮らせるようになっていきました。

それから四十年、ダビデもすっかり年を取り、若いときのような元気はどこにもありません。夏でも寒いと言って毛布をかぶり、人の助けを受けなければ身の回りのことはできなくなってきています。こんなとき、人々はあからさまに口には出しませんが、だれもが考え始めます。ダビデが死んだら、次は誰が王となるのか。

日本においても天皇の世継ぎのことが問題となっています。幸いにしてすべては法律で定められていますから、誰かが勝手に自分が天皇になると言い出すことはあり得ません。

ダビデの時はどうだったか。イスラエルにおいても、日本の天皇と同じように、血のつながった長男が世継ぎとなるのが習わしで、長男に不測の事態が起きたなら、その下の弟がその役割を担うのが習慣となっていました。ダビデ家の場合は、長男、次男、三男は全員死んでしまいましたので、四男のアドニヤが世継ぎの資格を持つことになりました。しかしそれはあくまでも資格に過ぎません。最終的には父ダビデに指名してもらわな

ればなりません。ところが父親は、いつまで経っても後継者の指名をしません。アドニヤは考えます。父は、もしかしてバテ・シェバの息子であるソロモンに王位を譲ろうとしているのではないか。こうなれば、先手を打つしかありません。父親は何もできなくなっていることをいいことに、アドニヤは自分に味方する者を密かに集め、「我こそがイスラエルの王である」と宣言してしまいました。それが前回までのあらすじです。

## 1 ナタンのお告げ

アドニヤが父にそむいてクーデターを起こしたとの情報は、早速預言者であるナタンにもたらされました。ナタンはすぐにソロモンの母バテ・シェバの所に出かけ、こう言います。12節。「さあ、今、わたしがあなたに助言をいたしますから、あなたのいのちとあなたの子ソロモンのいのちを助けなさい。」

どうしてナタンは真っ先にバテ・シェバの所に向かったのでしょうか。アドニヤは、強引にイスラエル王即位式を盛大に開催します。そこに呼ばれたのは当然アドニヤを支持する人たちです。10節に、「しかし、預言者ナタンや、ベナヤ、それに勇士たちや、彼の兄弟ソロモンは招かなかった」とあるように、当然のことですが、ダビデの側につく人たちは招きません。招きたくない者の筆頭に挙げられているのは預言者ナタンであり、その最後に記されているのはソロモンの名前です。

アドニヤがイスラエル王であると宣言したら、次にやることはなんでしょう。自分に

反対する者たち、ソロモンとその一族を徹底的につぶすことです。すぐに殺し屋を差し向けてくるでしょう。ナタンはそれに気がつきました。一刻の猶予也没有。バテ・シェバを励まし、これからなにをすればよいのか、具体的に助言を与えます。

## 2 バテ・シェバの進言

### 1) ダビデが主に誓ったことを思い起こさせる

バテ・シェバはすぐにダビデと面会し、こう切り出します。17, 18 節。「わが君。あなたは、あなたの神、主にかけて、『必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く』と、このはしためにお誓いになりました。それなのに、今、アドニヤが王となっています。王さま。あなたはそれをご存じないのです。」

ここで一つ考えなければならないことがあります。バテ・シェバは、王さまがずっと以前にソロモンが跡を継いで王となることを主に誓った、と言っています。いつそんなことを誓ったのか。実は聖書を調べても具体的な事を書いていないのです。では、預言者ナタンはありもしないことを考えついたのか。そうではありません。というのは、この後、ダビデも自分が誓っていたことを認めているからです。では、いったいつダビデは誓っていたのでしょうか。

### 2) 罪を犯したダビデ

そのことは、ソロモン誕生と関わっています。ダビデが人妻であったバテ・シェバを横取りし、バテ・シェバの夫であったウリヤを殺したことがありました。ダビデは当初自分の罪を隠し通そうとしましたが、あるとき預

言者ナタンに責められ、言い訳ができなくなり、「私は主に対して罪を犯した」と告白に導かれ、そのときダビデの罪は赦されました。ところがそのとき、ナタンは、今身ごもっているバテ・シェバはやがて子供を産むけれど、その子どもは必ず死ぬと予告します。ダビデはなんとか子どものいのちを助けて欲しいと願い、断食までして祈るのですが、生まれてきた子どもは死んでしまいました。

### 3) ソロモンの別名「主に愛される者」

その後生まれたのがソロモンです。そのあたりの事情が第二サムエル記12章24, 25節に書かれています。「ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女の所に入り、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。主はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。」

エディデヤとは、「主に愛される者」という意味だと聖書の欄外に説明があります。エディデヤと名をつけたのは、だれでしょうか。私はてっきり最初、ダビデがつけたと思い込んでいました。ダビデではありません。よく読むと、主がナタンを遣わし、ナタンがエディデヤとつけたと書いています。ダビデがあれほどのひどい罪を犯したとしても、罪を告白したとき、その先に大きな救いの恵みを備えてくださることをソロモンという子どもを通して知らされます。ダビデにとってソロモンは特別なのです。

### 4) ダビデが誓う

いっぽうバテ・シェバはどうか。前の夫ウリヤは、ダビデに殺されました。思いがけなく王の妻という立場に迎えられましたが、最

初の子どもは死にしました。ソロモンが生まれても、この子が世継ぎになることは順番から言えばほとんどありえません。結局、自分の人生はなんだったのか。心の中に非常に複雑なものをかかえています。ダビデはそんなバテ・シェバの思いを感じ取ります。いろいろ慰めのことをかけました。しかしなかなかバテ・シェバの心は晴れません。

そんなとき、ナタンがやってきて、ソロモンにエディデヤと名をつけます。名前の通りに、主はこの子を特別に愛しておられることがわかりました。ダビデは、やがてこの子がイスラエルの王座に着くことを確信します。おそらくそのときダビデはバテ・シェバに誓ったのだろうと考えられます。「必ず、あなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に着く。」

この約束は、それまで心がふさいでいたバテ・シェバにとっておおきな希望となりました。つらい人生だけれども、息子を大切に育てればきっと未来は開けると思ったでしょう。しかし、これを知っているのはダビデとバテ・シェバとナタンだけです。公にされたわけではありません。そのことが後々問題を複雑にしています。

### 3 イエス・キリスト

#### 1) もし世継ぎを告げなければ

今日の箇所を表面的に読めば、どこにでもありそうな跡目争いに過ぎません。しかしここにも救いの恵みが記されているはず。ここからイエス・キリストのことを考えたいと思います。ポイントは20, 21節です。「王さま。王さまの跡を継いで、誰が王さまの王座に着くかを告げて告げていただきたいと、今や、すべてのイスラエルの目はあなたの上

に注がれています。そうでないと、王さまがご先祖たちとともに眠りにつかれるとき、私と私の子ソロモンは罪を犯したものとみなされるでしょう。」

バテ・シェバはもしダビデが世継ぎを告げなければ、自分たちは罪ある者としてさばかれると告白します。ダビデが公に後継者を指名しないままにいるなら、ソロモンとその一族は殺される。そのことを言っています。差し迫ってくる危険を感じながらバテ・シェバはダビデに懇願します。バテ・シェバの口を通して、神は深いことを語らせていることに気がつきます。

#### 2) 罪ある者とされる

よく考え見ると疑問が湧きます。そもそも、どうしてこんなに問題が大きくなるまで回りにいる人たちはダビデに世継ぎを指名するようにと助言しなかったのか。不思議に思いませんか。日本の天皇ならば、法律によって皇太子が世継ぎとなることが決まっているので、混乱は起きません。ダビデももっと早い時期に世継ぎを指名しておけばよかったです。確かにその通り。これはダビデのミスです。

ではなぜ回りの人はアドバイスしなかったのか。だれもそのことを口にはいけなかったからです。世継ぎを指名してください、言うことは、ダビデ、あなたは死んでくださいと言っているのと同じなのです。そうすると、バテ・シェバは何をいったことになるのか。ダビデ王よ、あなたは死んでください。もしあなたが死ななければ、私たちは罪ある者として殺されることになります。そう言ったことになる。

### 3) 人を救うために王が死ぬ

バテ・シェバのしたことは、ダビデに、「早く死んでください」と言うのも同然のことですから、ダビデがこれを聞いて怒り出す可能性が十分にありました。だからナタンは周到に準備するのです。バテ・シェバが危険な目に遭うことがないように、ナタンも出て来てダビデを説得する。そのような準備をしていく。

結局どうなったか。ダビデは二人の説得を受け入れます。自分が今は死ぬときであることを受け入れます。ダビデが死を受け入れることによって、ソロモンが主の約束どおりに王となり、イスラエルは救われていきます。

ダビデのことから主イエス・キリストが浮かび上がります。主は、私たちが罪ある者とならないようにと、進んでご自分の死を受け入れてくださいました。そのことは頭では知っていたでしょう。でももういちど、その重さを考えたいと思います。私たちはとてつもなく大きなことを神に要求していたことになります。あなたが死ななければ、私たちは罪人のままさばかれます。ですからあなたが死んでください。いや、神は私たちが要求する以前から、すでにご自分が十字架で死ぬことを下さっていました。私たちはその恵みを後から知らせたのです。

私たちが罪人であったときにいのちを差し出してくださった主の恵みを覚えたいと願います。